

令和6年度中国・南昌市への青少年訪問団派遣事業 事後報告書

◆名前： 川路 真桜

江西省及び南昌市に滞在中の様子や本事業で得たこと、感想等をご記入ください。
(1, 000字程度)

中国の歴史ドラマや紀行番組を観たことがきっかけで中国訪問に憧れがあり、今回青少年訪問団として南昌市と景德鎮市に滞在することができ、有意義な経験となった。その中で訪中前と後で中国に対する印象が変わった。

まず、自分の想像以上に中国の歴史の長さを実感した。そして、歴史的な遺産が大切にされていると感じた。例えば、景德鎮中国陶磁博物館では、各時代象徴的な作品が展示されており、青色や赤色の無地の磁器から白い磁器に紺色で絵付けられたものや緑や赤でよりカラフルに色づけられたものもあった。当時の皇帝の好みによって同じ時代でも前後の皇帝の御代で、作品のスタイルが変わるそう。この博物館には、1000年分の作品が集められているようで、約2時間の見学でまるで中国の歴史をタイムトリップした気持ちになった。博物館の他に陶磁器の窯跡をいくつか見学した。大小、形も様々だったが、現在も使えるくらい状態の良い窯もあった。また、周辺には古い伝統的な住居群があり、国が費用を負担して整備していた。国内でも遺跡や古い建物の維持には修繕自体の難しさや費用面で課題も多いと聞く。そのため、観光に国家をあげて力を入れていることには驚き、今後も観光地として賑わってほしいと感じた。

中国に憧れを抱く一方で、現在の日中関係は課題が多く、現地でどのような反応をされるか不安な面もあった。しかし、その不安は学生との直接の交流で打ち消すことができた。まずは、中日友好交流大会歓迎宴会だ。日本人5人に対し、日本語を学ぶ学生2人と円卓を囲った。彼らの学校では、入試に中国語の他に日本語とロシア語を選択できるそう。学生は1万人いて、そのうち日本語を専攻する学生は100人と非常に数は少ない。そんな中でも日本語を専攻し、流暢な日本語で将来は日本の学校に留学したいと夢を話してくれた。また、景德鎮市で会った日本語専攻の学生は、みんなアニメや漫画の影響を受けて日本語の勉強を始めたと言っていた。中国の同世代の若者は自分が考えていたほど、日本に対して悪い印象を持っておらず、むしろアニメや漫画を通じて日本に憧れをもってくれていると強く感じた。

今回の経験を生かして、南昌市や景德鎮市の魅力をまずは周囲の人に伝えたい。また、日中関係がより良い方向に進んでほしいと強く感じた。

最後に私たちが暖かく迎えてくださった江西省、南昌市、および景德鎮市の皆様、滞在中サポートしてくださった高松市国際交流協会と高松市役所の皆様に感謝申し上げます。

